

「まず知ってもらおうことが大事だ」

こうこくぎょう せんくしゃ

広告業の先駆者

せぎ ひろなお
瀬木 博尚



自分らしい生き方を探す決心

1894（明治27）年の春、一人の男が東京をめざして、山道をもくもくと歩いていました。その人こそが、瀬木博尚さん、41歳です。

自分らしい生き方を見つけるために、東京へ行くのだ。

日本が明治時代を迎えると、人々の暮らしは大きく変わりました。

着物から洋服へ、ろうそくや油の明かりからランプや電灯へ、かごから人力車や馬車へと、アメリカやヨーロッパの文化が次々と日本中に広まっていたのです。

武士だった博尚さんも、腰に差した2本の刀をはずして、役人として働いていました。しかし、博尚さんには、その仕事が本当にやりたいことには思えなかったのです。



ほう、アメリカには雑誌や新聞に品物の宣伝を載せる「広告」という仕事があるのか。おもしろそうだ！この仕事をやってみたい。

日本で初めて「広告」の仕事に取り組んだのが、瀬木博尚さんなんだ。

私たちの身の回りには、広告がたくさんありますね。

テレビのコマーシャルも、広告の一つだね。



3 仕事を起こそう

西暦	年齢	
1852年		富山市桃井町に生まれる
1894年	41歳	一大決心をして上京する
1895年	43歳	東京日本橋にわが国初の広告代理店「博報堂」をおこす スポーツ雑誌の先駆けとなる「運動界」を創刊する
1900年	47歳	『帝国少年議会議事録』を創刊する
1909年	56歳	『日本家庭百科事彙』(富山房)の広告を扱う
1923年	70歳	関東大震災によって会社の建物がこわれる
1924年	71歳	富山市内の小学校に「瀨木文庫」を寄贈する
1926年	73歳	「明治新聞雑誌文庫」を設立し、東京大学に寄贈する
1939年	86歳	亡くなる

瀨木博尚さんの三十二年表



東京都・神田にあったころの博報堂(右)と、田町にある現在の博報堂(左)。現在、約3300人もの社員が働いています。

「文明開化の進む東京なら、新しい時代にふさわしい新しい夢が、きつと見つかるはずだ」

そう考えた博尚さんは、ふるさとを後にしました。東京までは、徒歩で十数日もかかる道のりでしたが、博尚さんの足取りは、軽々としていました。

広告代理店を創業

希望に胸をふくらませて上京した博尚さんでしたが、頼りにしていた友人は、食べ物にも困るほど、苦しい生活を送っていました。

いつまでもお世話になってはいけない、何とか張り立ちをしたい。

博尚さんは、自分の一生をかけたいと思える仕事を探し続けました。

そんなある日、アメリカから帰国した知人から、いろいろな話を聞く機会がありました。

「ほつ、新聞や雑誌に書籍の広告を載せる仕事があるのか。いいぞ、この仕事だ。わしが全力で取り組むのは、この仕事しかない！」

この時、博尚さんの胸は、大きく高鳴ったのです。「日本もこれから新聞や雑誌がどんどん発行され、広告が必要となるだろう。誰もやったことがない仕事だからこそ、やりがいがあるぞ」

人生の目標を見つけた博尚さんは、さっそく、日本で初めての広告代理店を設立しました。

会社の名前は「博報堂」。博尚さんは、自分の名前の一字を用いて、不当な利益を求めず、細く長く最小限の利益を得て、博くお客さまに奉仕報酬するという思いを込めたのでした。

広告取りに苦戦

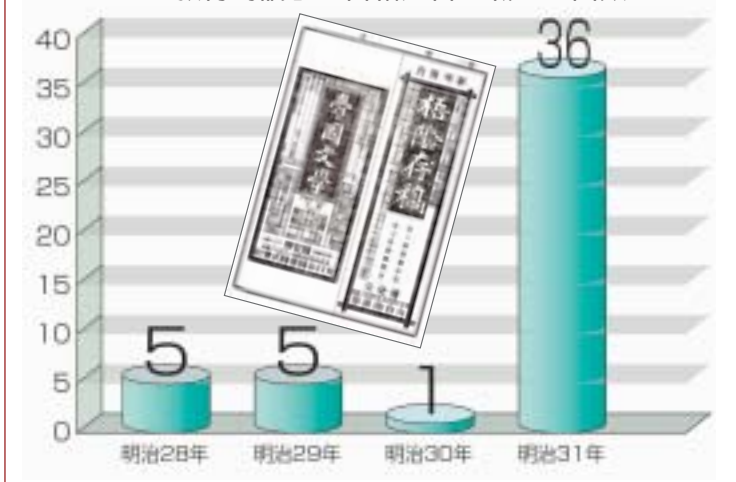
博尚さんの最初の仕事は、「教育時論」などの教育雑誌に、書籍の広告を載せることでした。

しかし、教育雑誌は発行部数が少ないため、会社の経営は、思うようにはいきませんでした。

博尚さんは、広告主になりそうな会社を次々と訪ねましたが、最初のうちは広告の重要性が分かってもらえず、断られてばかりいました。

「広告の大切さを知らないから、みんなはわしのことを信用しないのだろう。でも、広告を出して売り上げが伸びれば、きつと分かってくれるはずだ」

「教育時論」に書籍広告を載せた回数



明治28年10月15日発行の雑誌「教育時論」に、博尚さんが手がけた広告が、初めて載りました。グラフから、広告の数が順調に伸びず、博尚さんが苦戦していたことがわかります。

「広告には工夫がいっぱい！」

富山市立堀川小学校4年生のお友達が、スーパーマーケットのチラシ広告を参考にして、広告のアイデアについてまとめてくれました。



チラシ広告／若尾さやかさん

他の店よりも安い目玉商品は、大きく書いてあるね。

(越野友裕さん)

88円均一と書くと、安い品物がたくさんあるように見えるね。

(成元棕祐さん)

クーポン券がついていると、ただで景品がもらえると思って、たくさんお客さんが来るね。

(片岡和也さん)

「こうして、3名の社員を雇いながら、社長である博尚さんも休むことなく働き続けました。やがて、博尚さんの努力が少しずつ実って、広告を頼むお客が増えてきました。『博報堂に広告を頼むといいぞ。お客のことを考えてくれて、とても親切だ』」

そういう評判が次第に輪のように広がっていったのです。博尚さんは、販売部数が多い一流雑誌の広告や、大きな新聞社の広告も取り扱うようになりました。

そのうち、博尚さんは、世の中の人々が「新しいことを知りたい」「いろいろなことをやってみてみたい」という気持ちをもっていていることに気づきました。

日本の出版文化のために

そこで、博尚さんは広告だけでなく、出版物も手がけるようになりまし。スポーツ雑誌の先がけとなる『運動界』や、『帝国少年議会議事録』を発行するなど、今までなかった分野に目をつけ、出版物に対する人々の関心を高めていったのです。

富山房という会社が、日本最初の家庭百科事典と言われる『日本家庭百科事典』を発行したときのことです。博尚さんは、その『日本家庭百科事典』の広告を、新聞や雑誌に載せる仕事を頼まれました。しかし、当時、事典は学者が使うもので、一般の人々には縁遠いものでした。

「この事典が売れなければ、わが社も大きな被害を受けてしまうかもしれない」

実際、博尚さんには、広告主の会社が倒産したため、広告料金を払ってもらえず、大きな赤字を抱えた経験がありました。それでも、博尚さんは考えました。

この事典には夢がある。ページをめくるだけで、知らない世界と出会うことができる。こういう書物こそ、その良さを知らなくてもらうために、広告が必要なのだ！

博尚さんは、危険を承知で、

子どもたちの感想

富山市立堀川小学校4年生のお友達の感想です。

博尚さんは、41歳から広告の仕事を始めました。私の父よりも4歳下だけど、年をとっても新しいことを始めようとする気持ちをもっていてすごいなと思いました。

(平井榎子さん)

広告代金が回収できなくて、会社の経営が危なくなったことだってあるのに、売れるかどうかから『日本家庭百科事典』の広告を引き受けることがよくできた。私だったら前のことを気にしてこの仕事はことわるだろうな。

(田中はる佳さん)

「広告取り」とばかにされても、夢をあきらめなかったのがすごいな。私だったら、悪口を言われたら、その時点で仕事をやめると思います。

(寺越 愛さん)

自分のやりたい仕事を探すために、富山から東京まで十数日間歩き通しているから、すごいなと思いました。

(宮崎真基さん)

博尚さんは、もうすでに亡くなってしまうけど、世の中に博尚さんみたいな人がたくさんいたらいいな。だって、だれも気がつかないアイデアをもって、社会に役立つとがんばっているからです。

(畔田千寛さん)



日本で初めて、
テレビの公開実験を
手がけた発明家

川原田 政太郎



瀬木博尚さんのように、新しい仕事に挑戦した先輩に、川原田政太郎さんがいます。

政太郎さんは、留学先のロンドンで、テレビの実験を見たとき、その仕組みに驚きました。「おお、画像が動く。まるで紙芝居を見ているようだ。私にも作れるだろうか」

政太郎さんは一目で、「遠くの人物が話したり手を振ったりする様子を映す、魔法のような箱」に夢中になったのです。

政太郎さんは、帰国後、さつそくテレビ作りに没頭しました。当時、日本ではラジオさえも珍しい時代で、テレビは、普通の人々にはとても思いつかないものでした。周囲の人々になかなか理解してもらえず、研究費が集まらなかつたほどです。

1930(昭和5)年、政太郎さんのテレビの研究は、ついに公開実験の段階までにたどり着きました。朝日新聞社の講堂で、日本で初めてテレビの実験を行ったのです。翌年には、世界初の野外実況中継も実現しました。

残念ながら、現在のテレビは、政太郎さんの考えた仕組みとは違うタイプのもですが、政太郎さんは、確かに「魔法の箱」を自分の手で作り出したのです。

この仕事を引き受けました。人々の心の奥には、「新しいことを知るのことは楽しい」という気持ちがあるはずだ。

この事典を知れば、きつと買いたいたいという人がたくさん出てくるだろう。

そして、本は飛ぶように売れました。なんと7万部も売れたのです。

このように、博尚さんは、自分の会社の利益だけでなく、日本の出版文化のためになる仕事にも、積極的に取り組むようになりました。

関東大震災で多くの書物が焼失してしまったときも、出版物を保存するために、多額のお金を寄付し、東京大学に「明治新聞雑誌文庫」を設立しました。

この「明治新聞雑誌文庫」には、明治・大正時代の人々のくらしや文化などを研究する資料が納められ、今日でも多くのの人々から活用されています。

広告という、新しい分野を切りひらいた博尚さん。博尚さんは、人生の半ばで見つけた夢を、大きく育てあげたのです。今、私たちのまわりにある広告は、博尚さんが追いかめた夢の証なのです。

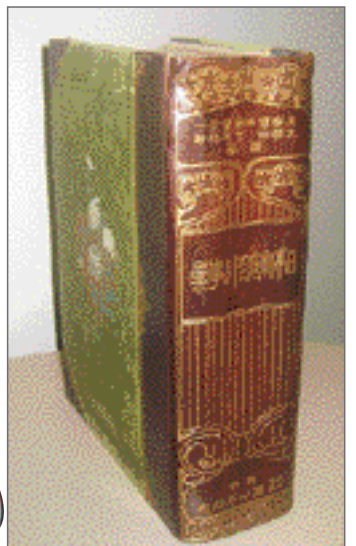
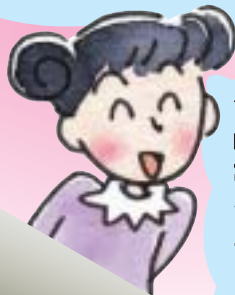


富山房から発刊された『日本家庭百科事彙』

出版物への恩返しという気持ちが感じられるね。

博尚さんは、富山市内の9つの小学校と富山市立図書館にも、3257冊の図書と本棚を寄付したそうです。

「明治新聞雑誌文庫」には、当時の新聞420種類23万枚、雑誌2600種類8万部、一般図書3500部、小説350冊も集められたんだ。



瀬木博尚さんが博報堂を創立した10年後、ノートやバインダーなど、文房具で有名なコクヨという会社が生まれました。この会社を始めた人が、次のページで紹介する黒田善太郎さんです。